アンダマン諸島の終戦

平松　弘
鷺宮四丁目

北西ベンガル湾とインド洋上に浮かぶこの小島は、日本陸海軍の最前線の基地として、昭和十八年以降、戦線が南太平洋海域にも広く展開していた。

我々の所属の部隊も、同年十月二二日、スマトラ島「ペマタンシアンタル」に駐屯する近衛師団の一部砲兵、歩兵、海軍（陸戦隊）、軍属（農業指導員）らの混成大隊（約二千名）とともに、「南アンダマン島」ポートプレア港に無血上陸した。この島は、噂では、南西の地獄島と現地人から恐れられていた。

ここには、英国からの独立運動のため投獄された印度人、ビルマ人等がいたが、日本陸海軍の進駐により全員解放された。島一番の自慢は、岸壁の空にそびえる赤レンガを積み上げた五階建要塞のような巨大刑務所で、小説「モンテクリスト伯」のモデル島となったことでも有名である。

前述のシアンタルはオランダ領で、日本の軽井沢と気候風土がよく似ており、飲料水も充分あり、米を初めとする主食類、果物も豊富であった。その上、下水道が完備し、道路も舗装され、いかにオランダ政府が植民地政策に力を注いでいたかを知った。

これに反し、配属先のこの島では、生水が飲めないので困った。米、塩、砂糖も殆んど収穫できず、食料はごく少量の貴重な古米と乾燥野菜、ジャングルに生えているゼンマイ、ワラビのほか、乾パン等による雑炊である。そのような環境のなかで、連日の防衛陣地構築がつづく。また自給増産のため、きゅうり、なす等のバビリタン地区農園勤務約十か月、主野菜の確保など言語に絶するものがあった。そのうえ栄養失調の続出。マラリア、デング熱、アメーバ赤痢など、数知れぬ病魔との闘いの毎日であった。

揚句には、中隊で死亡者数名を出し、十九年十一月（日不明）には、待望していた食料品、医薬品満載の船舶が、英軍の潜水艦の魚雷によって、我々の目前で黒煙をあげて轟沈。神風は遂に吹かなかった。

二〇年一月一日、前川小隊長（復員後死亡）は、隊員に「全

員死に方用意五分前」と年頭示唆した。一同遙か何千里、遠く離れた故郷を伏し拝み、涙がとめどもなく流れた。

この緊迫した状況下で、二、三月頃になると、峰村中隊長（戦後再会不能）の伝達で、東京を初め大都市に対して、連日、B29による大爆撃が無差別に行なわれていることを知った。

我々学徒兵の間には、これで勝てるかという疑問が大きく広がった。終戦も間近になっていたのか軍規もゆるみ、ただ食うだけに懸命だった。

そんなとき特命により陣中日誌、出征時の寄せ書きの日の丸、千人針、家族からの手紙、写真などの私物まで上官の命令で焼却した。

そして、八月十五日を迎えたが、終戦の玉音放送を知る由もなかった。だが、英軍による連日の無気味なズドンという艦砲射撃もハタと止んだ。「何だか様子がおかしい」。誰言うとなく戦いが終ったとの噂が、それからそれへと伝わった。

松浦大隊長から「全員集合」の命令で、兵舎前に集まった。そこで、日本の敗戦を知らされた。我々のとまどいと落胆は計り知れなかった。雑炊ものどを通らず、眠ることも忘れて、同期の戦友諸君とこれからの生活、また内地に無事帰還後の連絡など語り合い、少しずつ神経が正常になるよう努力した。

英印軍の上陸の報が伝達されてから、八月下旬頃だと思う。島のポートプレア港に艦船が現われ、武装した印軍の将兵数十名が「カーモンチョッ」と奇声を発しつつ船のハッチからジープ二、三台で進駐してきた。かくして武装解除による日本軍敗戦が決定的となった。

九月上旬英印軍の占領後は、戦犯容疑者追求が一段と強められ、海軍主計将校、野戦倉庫兵站部に勤務中の下士官、兵、給与に関係した兵、農業指導員などで、島の住民印度人、ビルマ人や労務者（苦力（クーリー））および家族に対して、撲殺、暴行など実行した者は、村長をはじめ現地人の強い密告によって即刻現地で処刑（銃殺）された。

我々は、昔からご三方の職業といわれた、馬方、上方、船方など貴重な体験として、幸運にも英印軍の俘虜となり、レンバン島（無人島）に連行され、そこで道路工事、農園作業に従事した。ノルマは比較的楽だった。英軍からは、ビスケット、チョコ、ピーナツバター、たばこ（五本入）などのレーション（携帯口糧）の給与を受けたが、上官からの命令で、朝、昼、晩の三つ重ねのカンヅメのうち、ひとつは「非常用に残せ」という馬鹿げた指示をうけていた。カロリーは十分とれたが、いつも空腹だった。だが、いつか帰還できることを念じつつ、命令どおり忠実に働いた。ことに同じアジア人の印度将兵（ターバン姿）の好意的な笑顔と親日的扱い、英軍の規律正しい態度には、感謝すること多大なものがあった。また作業の小休止のときには、印度将兵から本国から伝われる易道（占い）の教授を受け

たりした。

こうした捕虜生活の中での我々一同の考えは、赤紙一枚で召集を受け、牛馬より低い扱いを受けたのだから、こんな軍隊で死んでたまるかという反抗心が根強く残り、小高い兵舎の窓から、キラキラ輝く南十字星を見ながら、同期の戦友と無傷で帰還できるようにと誓い合った。

そして、昭和二一年五月六日、待望の日がきた。「全員集合」の伝達で、ようやくレンバン島を出航した。病院船では、毎朝、軍人勅諭の「一、軍人は忠節をつくすことを本分とすべし」と大声を発するという、馬鹿げた合唱が続けられた。五月二三日、和歌山県田辺港に上陸、風薫る懐かしい日本の五月の陽光が目にしみた。

桟橋の方から、並木路子の「リンゴの歌」の軽快なメロディが聞こえてきた。数年ぶりでみた色白で黒い瞳の日本女性の美しさが、南方ボケの頭にようやく活力と生きる勇気を与えてくれた。

そして、ご親兵なので、皇后からの虎屋の練羊羹（宮内庁ご用達）と、援護局からの三百円（新円）と東京までの切符をもらい、溢れくる解放感に胸一杯の希望に燃えて一路帰京した。幸い家族は、戦災にあわなかったが、私と兄二人とも激戦地に召集を受けていたから、両親は心労の余り病に伏せていた。私の両手をにぎりしめ、「無事でよかった、よかった」と繰り返し、涙を流して喜んでくれた母の眼が今でも忘れられない。

その母も、父も、そして長兄も今はこの世にいない。

参考

たった一年のちがいで、昭和十八年以降、文系の学生が卒業しないで、急造の将校として、前途有望な青年達を死に追い込んだ陸軍高級幹部が憎い。

昭和十七年は、二月と九月の二回に分けて、繰り上げ卒業で、過半数が諸官庁、一流会社に就職していた。

また軍歌の外に、ビクター音響メカに勤務のT君、日産自動車勤務のS君などがよく歌った唄を、ここに紹介してみよう。

「軍隊小唄（作者不明）」

いやじゃありませんか軍隊は
金の茶碗に　金の箸
仏様でもあるまいに
いちぜん飯とは　情けなや

腰の軍刀にしがみつき
連れていかんせ　どこまでも
連れていくのはやすけれど
女はのせない　野砲隊

「スーチャン節（作者不明）」

人のいやがる　軍隊へ
志願で出てくる　馬鹿もいる
お国のためとは　いいながら
かわいいスーチャンと　泣きわかれ

夜の夜中に　起こされて
立たなきゃならない　不寝番
もしも居眠り　したときは
いかなきゃならない　重営倉

「ダンチョネ節（作者不明）」

俺が死んだら　三途の川で
ダンチョウネ
鬼をあつめて　相撲する

俺が死ぬときゃ　ハンカチ振って
ダンチョウネ
友よあの娘よ　さようなら

ダンチョウネ